青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関連

大阪教育大学 白 井 利 明

Relationships between time perspective and time beliefs from adolescence to middle age

Toshiaki Shirai (Department of Psychology, Faculty of Education, Osaka University of Education, Tennoji-ku, Osaka 543)

This study attempted to clarify the age and sex differences in the perceptions of time perspective and time beliefs, and the relationships between them. A questionnaire consisted of Time Perspective Scale and Time Beliefs Scale was administered to 245 adolescents (range of age, 16-24), 46 young adults (25-39), and 150 middle aged persons (40-55). The main results were summarized as follows: (1) female adolescents showed a less sense of time perspective than the other age groups; (2) the same female adolescents expressed relatively higher degrees of *Setsumashugi* (the time belief of living only for the momentary pleasure); and (3) the *Setsumashugi* related with the lack of the sense of time perspective.

Key words: time perspective, time belief, adolescence, age difference, cohort difference.

青年期の重要な発達課題の1つとして、時間的展望の獲得があげられる。時間的展望の獲得とは、より遠くの将来や過去の事象が現在の行動に影響を及ぼすという時間的展望の広がり (extension) が拡大すること、将来に希望を持ち現在の生活に充実を感じ過去を受容するという時間的展望の感覚を持つことをいう。しかし、現代青年は時間的展望を獲得していないという指摘がある (たとえば、NHK 世論調査部, 1984)。

ところが、現代青年の時間的展望のあり方をそのように否定的にだけみるのではなく、その肯定的な役割を強調する見解もある。小此木(1982)と福島(1982)は、現代青年は将来が予測できないならできないままに生きるという新しい時間的展望のあり方を獲得しており、変動の激しい現代社会に適応するのに有効であるという。問題なのは中高年層であり、将来展望の明確な予測に固執するために時間的展望の感覚が得られず、危機に陥っている、とされている。

そこで、本研究は、第1に、現代青年が、中高年層に比較して、時間的展望の感覚が欠如しているかどうか、また、今が楽しければよいとする快楽の態度である刹那主義を持ち、将来のより高い目標の達成のために満足を遅延し努力する態度である展望主義を持たないかどうかを検討する。なお、行動に対する動機づけを含む個人的価値体系を信念と呼ぶが、刹那主義や展望主義は時間的展望に対する個人の信念であると考えられるので、これらを時間的信念と名づける。第2に、時間的展望と時間的信念の関係が年齢層によって違うかどうかを検討する。特に、現代青年は、展望主義でも刹那主義でもない

という拡散的な時間的信念が時間的展望の感覚の獲得と関連していたという報告があるが(白井, 1988), それが他の年齢層にみられない青年の特徴かどうかを検討する。

方 法

調査時期と実施方法、調査対象 1986年11月、国立○大学教育学部の学生に下記の質問紙調査を実施すると同時に、成人からも実施・回収してくるよう依頼した。調査対象は、16—24歳群は、男子 (平均年齢 20.0, *SD* 1.41) 99人、女子 (19.5, 1.09) 146人、25—39歳群は、男子 (32.6, 3.35) 23人、女子 (34.9, 3.38) 23人、40—55歳群は、男子 (48.6, 3.77) 67人、女子 (46.2, 3.29) 83人となった。なお、女子の就業率は、25—39歳群で 47.6%, 40—55歳群は 23.1% であった。

時間的展望尺度 白井(1988)の時間的展望尺度の質問項目の一部を加藤(1983)の同一性地位判別尺度も参考に修正し、将来展望・現在の充実感・時間的展望の拡散・過去受容の4領域からなる20項目を作成した。因子分析の結果、固有値の落込みと固有値1以上という基準から3因子を推定し、ヴァリマックス回転を施したが、有意性の高い因子構造を抽出できなかった。第1因子の固有値がかなり大きいことから、本尺度は1次元性の高い尺度であると考えられた。下位尺度に区分しないこととし、因子分析(主因子解)の第1因子の因子負荷量が.300以下だった1項目(“私にとって過去とは心の支えである”)を除き、残り19項目からなる時間的展望尺度を作成した(付録1)。各項目と当該の項目を除く合計得

点の相関をみたところ、いずれの項目も .300 以上の有意な相関係数が得られた。内的整合性信頼性をみるために性別年齢群ごとに α 係数を計算したところ、.83 から .91 に至る高い値が得られた。また、再検査信頼性を調べるために、O 大学教育学部学生と M 看護専門学校学生に一定期間において調査を実施した ($N=55$ 、ただし人数は一定ではない) 結果、ピアソンの相関係数で、2週間後が .88 ($p<.001$)、10週間後が .82 ($p<.001$) という高い値が得られた。

時間的信念尺度 白井(1988)で使用した尺度の質問項目のうち欲求の表現の項目を信念の表現に改め、15項目を作成した。データの因子分析(主因子解)の結果、第2因子と第3因子との間に固有値の落込みが認められ、第3因子以下は固有値が1以下となることから、2つの因子を推定し、ヴァリマックス回転を施した。当該の因子の負荷量が .40 以上で他の因子の負荷量が .30 以下になるような12項目を抽出し(付録2)、さらにヴァリマックス回転を施したところ、当該の因子の負荷量が .50 以上で他の因子の負荷量が .26 未満になった。第1因子は、“現在をしっかりと生きることが将来を切り開く”などの項目に因子負荷量が高く、展望主義と命名した。第2因子は、“今が楽しければそれでよい”などの項目に因子負荷量が高く、刹那主義と命名した。 α 係数を性別年齢群ごとに計算したところ、展望主義において .66 から .83 に至る値が得られ、刹那主義においては .62 から .78 に至る値が得られた。再検査信頼性は、2週間後では、展望主義が .68 ($p<.001$)、刹那主義が .81 ($p<.001$)、10週間後では、展望主義が .75 ($p<.001$)、刹那主義が .85 ($p<.001$) であった。なお、2つの下位尺度間の相関係数を性別年齢群ごとに計算したところ、-.18 から -.04 に至る全て統計的に有意でない値が得られ、全ての性別年齢群において2つの下位尺度の独立性が確かめられた。

結果の集計の方法 時間的展望尺度の回答形式は、“あてはまる”から“あてはまらない”までの5件法、時間的信念尺度は、“賛成”から“反対”までの5件法とした。5点から1点へと得点化し集計した。尺度得点は、それぞれの尺度・下位尺度ごとに項目の評定値の合計得点をその項目数で割ったものをあて、5点から1点までの範囲となった。

結 果

年齢差 Fig. 1 に示されるように、男子では、展望主義に年齢差がみられた ($F_{(2,186)}=6.11, p<.01$)。多重比較の結果、25—39 歳群が 16—24 歳群と 40—55 歳群より展望主義の肯定が減少していた。女子では、時間的展望において年齢差がみられ ($F_{(2,249)}=4.14, p<.05$)、16—24 歳群が 40—55 歳群よりも時間的展望の感覚が欠如して

いた。また女子の刹那主義においても年齢差がみられ ($F_{(2,249)}=5.17, p<.01$)、16—24 歳群が 25—39 歳群より肯定していた。

時間的展望と時間的信念との関連 Table 1 に示すように、偏相関係数を計算したが、それぞれの年齢群に含まれる年齢の範囲が広く、かつ年齢とそれぞれの尺度得点の間には一定の相関関係が予想されるので、時間的信念尺度の他方の下位尺度だけでなく、年齢による影響も統制した。男子では、どの年齢群でも、展望主義とは正の相関が、刹那主義とは負の相関が得られた。女子では、展望主義とは有意な相関が得られなかった。刹那主義では、25—39 歳群、40—55 歳群で正の相関が得られた。16—24 歳群では、展望主義とも、刹那主義とも相関がなかった。

さらに、時間的信念尺度の展望主義と刹那主義のそれぞれの中央値で二分し、2つの尺度の得点がともに高い者を統合群、ともに低い者を拡散群、展望主義が高く刹那主義が低い者を展望群、その逆を刹那群とした。性別・年齢群ごとに一要因の分散分析を実施したところ、男子では全ての年齢層で群間に有意差がみられた (16—24 歳, $F_{(3,95)}=4.11, p<.01$; 25—39 歳, $F_{(3,19)}=3.47, p<.05$; 40—55 歳, $F_{(3,63)}=13.77, p<.001$)。多重比較の結果、Fig. 2 にも示されるように、いずれの年齢群においても刹那群より展望群の方が時間的展望尺度の得点が

Fig. 1. 時間的展望と時間的信念の平均値の年齢的变化。

Table 1
時間的信念の時間的展望との偏相関係数

性別・年齢群 下位尺度	男 子			女 子		
	16-24	25-39	40-55	16-24	25-39	40-55
展 望 主 義	.28**	.60**	.53***	.14	.22	.18
利 那 主 義	-.27**	-.49*	-.57***	-.10	-.56**	-.45***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

有意に高かった。さらに、40—55 歳群では、展望群が統合群・刹那群・拡散群より有意に高かった。女子では、40—55 歳群のみが時間的信念のあり方により時間的展望の感覚に違いがみられ ($F_{(3,79)} = 5.59, p < .01$), 多重比較の結果、展望群が刹那群・拡散群より有意に高い得点が得られた。

考 察

以上の結果から、男子では、現代青年が他の年齢層に比べて時間的展望を欠いているわけでも、刹那主義に陥っているわけでもなかった。しかし、女子では、成人初期層・中年層と比べて時間的展望の感覚が欠如し、刹那主義を肯定していた。

男子では、展望主義は時間的展望の感覚と正の相関がみられたが、女子では相関がみられなかった。Cottle (1976) は、性差を新しい状況や可能性を切り開く男性役割と現在の条件を維持したり直接的な行為を促進する女性役割の違いだという。しかし、それだけでなく、現状として、女子は家事的労働や補助的労働に従事する場合が多く、女子が主体的に将来計画や過去の意味を決定できない立場にあるために展望主義が一般的な知識に留ま

り、時間的展望を切り開くに至らないのだとも考えられる。

展望主義でも刹那主義でもないとする拡散的な時間的信念は、時間的展望の感覚が欠如しており、白井 (1988) とは異なる結果となった。その理由として、白井 (1988) の展望主義尺度は将来展望の希求を測定しているのに対して、本研究の尺度は、展望主義的な信念に対する傾倒を測定しており、展望主義尺度の測定内容が違うことがあげられる。白井 (1988) の展望主義尺度が時間的展望の拡散と相関が高かったのに対して、本研究の尺度は時間的展望の感覚と相関が高かった。尺度の内容やこの結果から考えると、むしろ、展望主義でも刹那主義でもあるとする統合型の時間的信念が、時間的展望を持つとともにそれを固定化しない柔軟性を持った時間的信念のあり方ではないかと推測される。これは、自我同一性達成者はバランスのとれた時間的指向性 (balanced temporal orientation) を持つとし、高すぎる未来性 (futurity) も低すぎる未来性も問題があるという Rappaport, Enrich, & Wilson (1985) の研究結果によっても支持される。

しかし、統合型の時間的信念は、時間的展望の感覚が最も高い型ではなかった。展望主義を肯定し刹那主義を否定する展望型が最も時間的展望の感覚を持っていた。特に、中年層で、時間的展望の感覚において、展望型と有意差のみられる型が多くなることから、中年期は時間的展望がせばまり自我同一性の危機に直面する時期であり (岡本, 1985), 時間的信念が時間的展望の感覚の獲得と関連する度合が青年期よりも強まるのではないかと考えられる。そして、同時に、中年層において未来指向性が強く、展望主義が肯定的に認知され、あるいは刹那主義が否定的に認知される傾向が強いと考えられる。中年男子において、統合型の時間的信念を持つ者は、時間的展望の感覚が低かったので、中年層男子では、統合型の時間的信念は適応的な意味を持たないのではないかと推測される。

青年期の男子では、時間的展望と時間的信念の相関が低く、女子では相関がなかった。これが中年期とは異なる青年期特有の発達的特徴なのか、あるいは現代青年の世代の特徴なのかは、さらに検討の余地があろう。

Fig. 2. 時間的信念下位尺度の組合せによる群の時間的展望得点の平均値。

なお、青年女子において、時間的信念と時間的展望に関連があるとする白井(1988)と異なる結果が得られた原因として、本研究が時間的展望尺度を1次元としたために、時間的展望の過去・現在・未来および時間的展望の拡散という各側面ごとに検討ができなかったことが考えられる。時間的展望には広がりや現実性(reality)という側面もある。これらの時間的展望の各側面と時間的信念との関係の解明は今後の課題である。

引用文献

- Cottle, T. J. 1976 *Perceiving time*. New York: John Wiley & Sons.
- 福島 章 1982 幼児化の時代—子どもっぽくて、なぜわるい! 光文社
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- NHK 世論調査部(編) 1984 中学生・高校生の意識 日本放送出版協会
- 小此木啓吾 1982 視界ゼロに生きる——ソフトな自我の効用—— TBC ブリタニカ
- 岡本祐子 1985 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 33, 295-306.
- Rappaport, H., Enrich, K., & Wilson, A. 1985 Relation between ego identity and temporal perspective. *Journal of Personality and Social psychology*, 48, 1609-1620.
- 白井利明 1988 現代青年の時間的展望の構造 (1) 日本心理学会第52回大会発表論文集, 30.
——1990. 7. 26. 受稿, 1991. 3. 22. 受理——

付録 1 時間的展望尺度の項目(合計得点との相関の高い順に並べてある。番号は項目番号,* は逆転項目): (7) *私の将来は漠然としていてつかみどころがない (3) *毎日がなんとなく過ぎていく (15) *毎日がむなしく思うことがある (5) *私は自分のしたいことがわからなくなる時がある (9) *毎日が同じことの繰り返しで退屈だ (11) *自分の将来に不安を感じる (16) *私の悩みには出口がないように思う (10) *今の自分は本当の自分ではないような気がする (4) 私の将来には希望がもてる (1) *私には特にうちこむものがない (20) *将来のことはあまり考えたくない (12) 毎日の生活に喜びと満足がある (17) 私にはだいたいの将来計画がある (2) 私には将来の目標がある (8) *私は過去のことにこだわりすぎていると思う (18) 私は自分の過去を大切にしたい (13) 私の過去は今の私の土台である (6) *私の過去はつらいことばかりだった (14) *過去のことはあまり思い出したくない。

付録 2 時間的信念尺度の項目(因子負荷量の高い順):

1. 展望主義尺度 (11) 現在をしっかり生きることが将来を切り開く (13) 自分の夢の実現のために頑張るのが人生だ (6) 二度と来ない今を大切にしたい (7) 今がつかなくても将来のためなら我慢するべきだ (12) 今していることの価値は将来になってわかるものだ (2) 生きている実感のある今の一瞬が一番大切だ (8) 今が大切にできないで将来が大切にできるはずがない。 2. 刹那主義尺度 (5) 今が楽しければそれでよい (4) 無理に見通しを持つ必要はない (14) どうなるかわからない先のことを考えても仕方がない (3) 先がわからないなら、わからないまま生きる道はある (10) 将来のことをいちいち考えてそれに縛られるのは不自由だ。